

ヒドゥンカリキュラムとしての教師

教師が意識して言ったりしたりする教育行為と対比して、意識せずにやってしまう教育行為をヒドゥンカリキュラムと(隠れたカリキュラム)言ったりします。

例えば、教師が下駄箱にきちんと靴を入れていたとしましょう。

それを見て、教師が口に出さずとも、子どもたちが「靴はきちんと入れるものなんだなあ」と気づき、入れ方を整えるという場合がそれに当たります。

時には公のカリキュラムより、ヒドゥンカリキュラムの方が、子どもたちに強く影響を与えているということもあります。

次のような皮肉な話をお読みいただきましょう。

「ゴミを拾いましょう」と普段から子どもに言っている教師が、廊下に落ちているゴミに気がつかない。

「友達同士仲良くしなさいよ」と普段から子どもに言っている教師が、同僚教師を憎々しく思っていて、その先生が話しかけるといやな顔をしている。

「言葉遣いを丁寧に」と普段から子どもに言っている教師が、「おまえら、いい加減にしろよー」などと怒鳴っている。

「話は簡潔に短く」と普段から子どもに言っている教師が、だらだらと説明が長い。

こうした教師に限って、ほかの教師から指摘されたりすると、「子どもと教師は違う」とか「子どもの自主性に任せています」とか「子どもが気がつくまで待っています」などと美辞をビジビジと並べます。

しかし、勝敗ははっきりしています。

そうした教師のクラスの子どもたちが、廊下のゴミを拾うことや、友達同士仲良くすることや、言葉遣いが丁寧になることは、ほとんどないのです。

子どもは、その本性において模倣の能力を備えています。

まねすることによって成長するのです。

まねするには、まねするためのモデルが必要です。

そのモデルがズレていれば、当然成長もゆがむのです。

そのモデルとは、学校ではまず第一に教師であることを、教師は自覚すべきです。

伸びる教師は素直な教師

伸びる教師は、素直な教師だと私は思っています。

という私が、なかなか素直になれないのですが.....。

例えば、先輩教師が、「先生、子どもが帰ったあと教室の掃除してる？机やイスを並べてる？」なんて言ってくれます。

すると、こんな答えが帰ってきます。

よしお先生

「いやあ、してませんでした。そうですね、した方がいいですね。今日からします。ありがとうございます」

わるお先生

「わかっています。でも、ぼくは子どもたちの自主性に任せているんです。

さて、どちらの先生が伸びることができるでしょうか。

よしお先生にアドバイスした先輩教師は気持ちよく思い、また教えてくれるでしょう。かくして、よしお先生は多くの先輩教師から、かわいがられ、多くのことをさらに教えてもらえ、様々な方法について知ることになるでしょう。

一方、わるお先生にアドバイスした先輩教師は、おもしろくなく思い、周りの先生にも「わるお先生はせっかく教えてあげたのに何もきかない！」と言ったりします。するとますます、誰も何も教えてくれなくなります。結局自分の中だけで完結する底の浅い教師になってしまうことでしょう。

素直な教師には、多くの教師が味方してくれ、そうでない教師は取り残されていくのです。

学級通信で何をどう伝えるのか？

学級通信を書くときの私の基本方針は次のようなことでした。

子どもが、親に渡したくなるような通信にする

さらに、そのためにはどのような気をつけてきたかという、次のようなことでした。

・おもしろく書くこと。

- ・子どもをほめてあげること。
- ・実名を入れてあげること。

おもしろい通信であるからこそ、子どもはそのおもしろさを親と共有しようとして渡そうとするのです。おもしろくも何ともない通信を誰が人に渡そうとするでしょうか。昔の通信にこんなことを書いていました。

触りたくなるよね

新学期が始まって4日目くらいに、Mちゃんがおそろおそろ私のお腹に触って軽くなで回していました。

しばらく撫でたのち、ひとこと。「すごいね、先生。」

まわりに女子が2名いたのですが、「触りたくなるよね」と恵ちゃんに同調してしまいました。

そんなところで共感しなくてもいいのに……。

平成14年 学級通信

次に、子どもをほめてあげることです。

子どもは、親にほめられたいのです。

そして、自分がほめられている通信を誇らしげに親に渡したいのです。

さらに実名をあげることです。

実名をあげ、細かに描写するから親にも伝わるのです。

また、このことは子どもを見る目を鍛えることにもなります。

だって、よく見なきゃかけないのですから。

今年も、メイクミラクル！

この通信を書きながら、そういえば去年Tくんが跳び箱を跳べるようになったことを書いたなあ、と思い出しました。

今、体育でマット運動の学習をしています。

まずは、前転。前転は、もっとも簡単な技でありながら、きれいに回れる子どもはそんなにいません。私は、これを1時間みっちりやります。もちろんそれだけを指導するのではなくて、前転につながる基礎的な運動と組み合わせて、指導していきます。

さて、マット運動2時間目。基礎運動を5つやったあと、前転の復習。そして、後転。後転は「頭

の上に、足をつま先からつくんだよ」といったらたいへん上達しました。

さらに、今日の目玉。開脚前転。「できなくてもいいから3回練習しなさい」と指示します。そして、3点満点で評定します。この時できない子を、私は頭に入れます。

そして、その子の状態を考えながら、次の2つのことを教えました。

ひとつは、手をマットにつくタイミングです。

マットに手をつくタイミングは、足がつくと同時ですか。それとも、足がついたあとに手をつくのですか。

私は挙手させたあと、『これは、手をできるだけ早くついた方がいいのです』と答をいいました。

そして、実際にやってもらいました。すると、ここで一つの奇跡が起きました。さっきどうしてもお尻があがらなかったYくんの体がずっと自然に立ち上がったのです。

私は、みんなをすわらせて、Yくんにやってもらいました。私は「目の前で奇跡が起こったんだよ」といい拍手しました。

ふたつめに教えたことは、起きあがる時の手の着く位置です。

手をつく位置は、体から遠いところがいいのですか、真下ですか、お尻の下ですか。

これを私は『どちらがいいか、自分でやっごらん』といいました。これはもうやったら一目瞭然です。お尻の下がいいのです。

私は、「素早く、お尻の下に手を滑り込ませなさい」と指示しました。

すると、既にできたいたAくんまでが、「おお、これやりやすい!」と感激していました。

そして、一番端のマットで練習していたMちゃんもとうとうこのときにできたのです。

いっしょのマットで練習していたSちゃんがうれしそうに拍手していました。

人の喜びを自分のことのように受け止められるすばらしさを、私はあらためて子どもから教わったような気がしました。

平成14年 学級通信

係活動指導

今年もユニークな係がたくさんできました。去年無かった係がどんどんできあがっています。

私の一押しは、Sちゃんの考えた「シルエットクイズ係」です。シルエットを配って、「さて何のシルエットでしょう」というクイズを出します。

これは、グットアイデアです。Sちゃんに『どうやったら、思いつくの?』ときいたら、「何となくボーっとしてたら思いついたの」といっていました。私はボーっとするのは得意ですが、何も思い浮かびません。なにかボーっとするコツがあるのかもしれませんが。今度Sちゃんに詳しく教わろうと思います。

平成14年 学級通信

任命式

実は任命式を私は楽しみにしていました。Aくんが、児童会役員選挙に出るときに教室で、「僕は、全校朝会の時に自分の力を発揮できなかった。大きな声で司会ができなかった。だから、もう一度児童会役員になりたい」といっていたからです。

私は、任命式を楽しみにしていました。彰くんは、どんな声で自分の仕事をスタートさせるのか。

やがて、体育館にAくんの声は響き渡りました。「気をつけ！礼！！」。私は心の中で「やるう！」とつぶやきました。

もう一つKくんの歩き方のこともぜひ書いておきたいです。

名前が呼ばれて代表として、ステージに上がるとき実に颯爽と歩いていったのです。中指はぴっと伸び、姿勢は良く、視線はしっかりと前を見据えていました。実に気持ちのいい歩き方でした。

平成14年 学級通信